了承2
～りょうしょう その2～
FOR ADULT ONLY

まえがき&ごあいさつ

「ゆ、祐一さん…こんな格好は…恥ずかしいです…」

◇皆さんこんにちは&はじめまして。和泉弥生です。今回で通算１１冊目、オフセでは４冊目のKanon本は前回に続いて秋子さんの成人向けになりました。相変わらず秋子さんに弄ばれる祐一なのですが、秋子さんに加え…今度は名雪も一緒になって祐一を弄ぶと妄想全開の内容になってしまいました。

◇それと、即売会で無料配布していたペーパーにおまけで書いていたＳＳにイラストをつけて収録と廃品利用というかエコロジーな（核爆）一冊となりました。

◇と言う事で前書はこの辺にして本編のほうを楽しんでもらえると幸いです。

和泉弥生

◇祐一に強要されてスカートをたくし上げる秋子さんです。それにしても…スカートをたくし上げるのは描いてて楽しいです（笑）

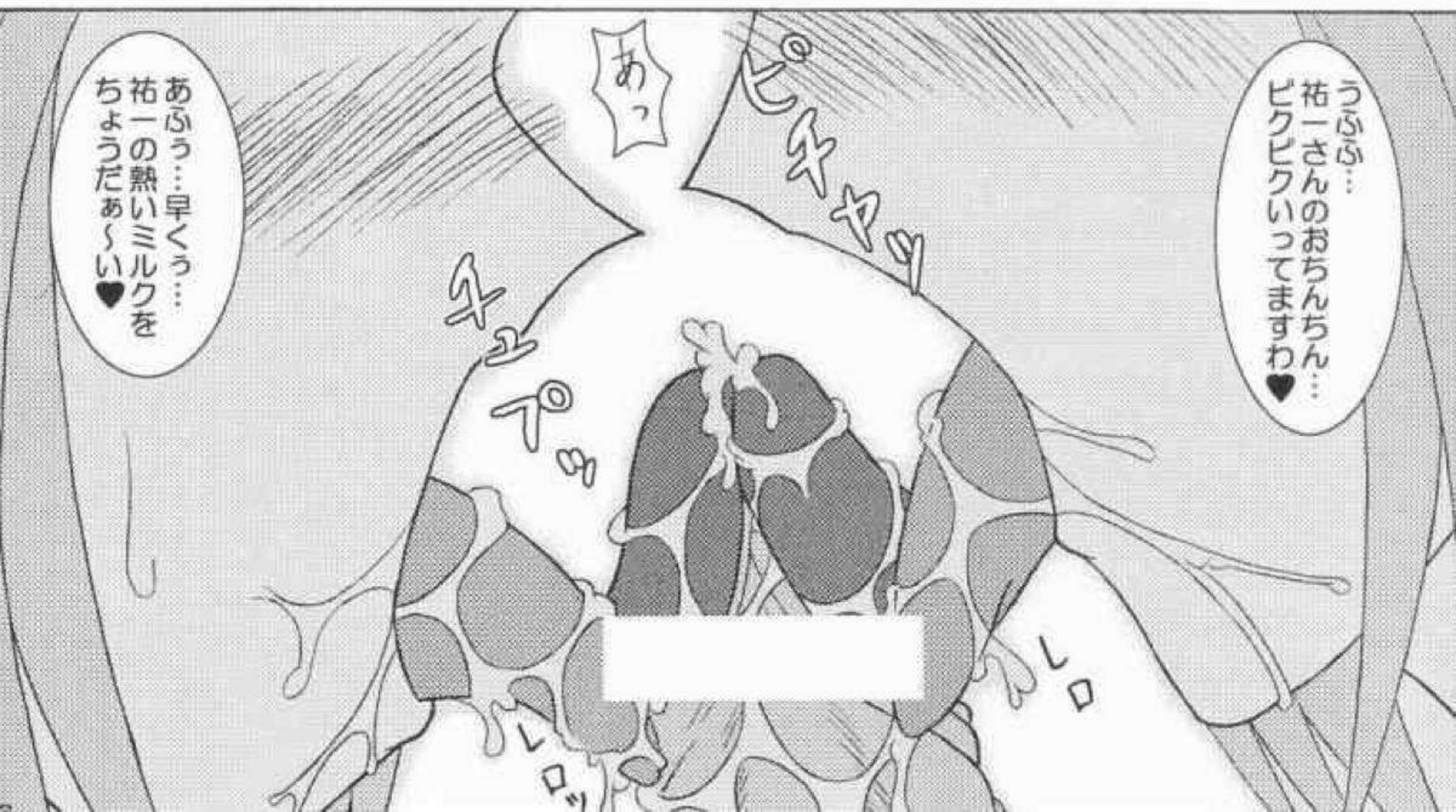
ピチャ
ピロ
ん
ふっ
あむっ
チュパッ
れろれろっ
ピチャッ
あ…秋子さん、名雪…そんなに激しくされたらお…俺…
ピチャ
チュパッ
あっ
あぁっ
ぴちゃ
ちゅっ
ちゅぱっ

いいよ祐一♥

了承♥ いっぱい射精してくださいね

ぺろ～

秋子と名雪の
ふたりで
尽くしてあげちゃう



ドピュッ

ビクッ

ビクッ

うふぅ…こんなにいっぱいぃ…
本当に…毎日あんなに射精してるのに…
やぁん♥祐一の精液で体中べとべとぉ…
あらあら…私も♥
ベトッ
ドロッ
お母さんのお顔…綺麗にしてあげるね
れろっ
うふふ…おかえし♥
れろっ
ピチャッ
ん…
ピチャッ
ん…
ピチャッ

あっ…

れろっ

ぴちゃ

見て、お母さん…

祐一ったらもうおちんちんを硬くしてるよ

私達が精液を舐めあってるのを見て興奮したみたい

くすっ

あらあら…えっちな子ね

うふふ…今日は私からでしたね♥

ごゅっ

うん…いいよお母さん

じゃあ…お先に祐一さんのおちんちんをいただきますわね

とろっ

ああん…ゆ…祐一さんが…おちんちんが奥まではいっていくのぉ♥

あはあっ♥

ビクッ

ズプ

ズプッ

うふふ、見えますか…
祐一さんのおちんちん…
全部はいっちゃいました

パッ

さあ…祐一さんも動いて…
秋子を気持ちよくして
くださいね♥

は…はい

ムニュッ

あ…あはぁ！
い…いいっ

ビクッ

そっその調子ですわ、
祐一さん！

ニュ
ニュ
ズチュ
ズチュ

あっあひぃ…
もっとぉ…もっと
秋子のおまんこを
突き上げてぇ！

ビクッ

ぐちゅっ

ずにゅっ

あふっ！

うふふ…
お母さんったら

ズニュッ

おっ奥まで
届くのぉ…

ズチュ

あっああ！

ねぇ、お母さん…そんなに気持ちいいの？

あはぁっ！きっ気持ちいいのぉ♥

ふ～ん、そうなんだ…じゃあねぇ…

ぐちゅっ

ずにゅっ

もっと気持ちよくしてあげる♥

ぷっ

！

あひっ！

ビクッ

な、名雪！お、お尻はだ…だめぇ！

ぐちゅっ

ズブッ

ビクッ

あれ、何がだめなの？お母さんのお尻…私の指をぐいぐい締め付けてくるよ…

とっとにかくだめなのぉ…

おにゅ

おにゅ

それに私、祐一から聞いてるもん…

お母さん…祐一と二人でする時はお尻でしてるって…

ここをこうやってぐりぐりと擦られるのがいいんでしょ

ぐりぐり

はひい！らっらめぇ

こうやって…おちんちんと一緒に膣を擦られるとたまんないんでしょ
ぐりっ
ずにゅっ
ああっ！
ほらっ…後がつかえてるんだからさっさとイってよ
そ…そんな…いやぁ…
祐一も激しくお母さんを突き上げてよ
あ…ああ
あ…ああんっ…そ、そんな祐一さん…はっ激しすぎますわ！
ズブッ
ズチュッ
ズチュ
ひっひいい！
グチュッ
も…もうらめぇ！
ビクッ
ビクッ
い…いくう…いっちゃう～！
うふふ…お母さんったらそんなにお尻がよかったのかしら
とさっ
ハァ
ハァ

じゃあ…お母さんも満足した所で

次は…私を気持ちよくしてね♥

ねぇ…祐一ぃ…早くおちんちんをちょうだい

くぱっ

すぷっ

あはぁ…おまんこが拡がってくのぉ♥

ゆ…祐一…私のなかをいっぱいかきまわしてぇ…

ずにゅっ

ぐちゅっ

ぷるんっ

たぷっ

あひぃっ!

あっ

ズチュ

ズチュッ

ヌプッ

ズブッ

ああっ!

ムニッ
ムニッ
ああっ
あっ
ずにゅっ
ずぶっ
あふっ
ずぷっ

いっいいのぉ…
もっと…もっとえぐってぇ…
ズニュッ
グチュッ
ズチュ
ズプッ

ゆっ祐一ぃ…祐一のおちんちん…気持ちいいよぉ
ああんっ
ハァ
名雪の膣も…きつくてぬるぬるしてて…すごくいいっ…よ

あらあら…2人ともすごく激しいわね…
ズブッ
ズッ
ズプッ
あはっ
いっ

名雪
あっ
ん…

名書ったら…あんなに気持ちよさそうな顔しちゃって…

いっ…いい

あっ

そんな顔されたら…私…またしたくなっちゃうじゃないの

くちゅ♥

もじもじ

ぎゅっ

ねえ、祐一さん

えっ…あ、はい

ぷよっ

ぼそっ

というわけなの

は、はあ

うふふ…そうだ♥

ニーッ

あっ やあっ！

ズプッ

ズチュ

ズプッ

うふふ…名雪ったら…祐一さんのおちんちんを美味しそうに頬張っちゃって…

グチュッ

ヌプッ

いやあ…恥ずかしい…

さっきのおかえし♥

ぴちゃっ

あっ

あっやぁ…お、お母さんや…やめてぇ…

そんなに激しくクリトリスを舐めないでぇ！

ビクッ

ビクッ

ちゅぷっ

れろっ

ちゅぷっ

そ、それは…ああん…だめぇ！

あひい！いっちゃうぅ～！

ビクッ

ビクッ

ぴちゃ

ちゅっ

うふふ…祐一さんから聞いた通りね…おちんちんをいれたままクリちゃんを弄られるとすぐいっちゃうんですって？

あらあら…名雪ったらそんなにクリちゃんがよかったのかしら？

ほら…イッたんだから次は私の番でしょ

ちゅぽんっ

そんなぁ…もっと欲しいのにぃ…

う～、お母さんのいじわるぅ

先にゆってきたのは名雪のほうでしょ

ぷち～

う…うん

ねぇ名雪、自分だけが気持ちよくなってばかりじゃだめでしょ

だからね

今度は二人で祐一さんを気持ちよくしてあげましょうね

うん…そうだね

ぷにっ

ぎゅっ

ムニュウ

トンレっ

うふふ…祐一さんたら二人いっぺんにだなんて

もう…祐一のエッチ♥

うふ、こうしてると…名雪としてるみたいだわ

ああん…お母さん…そんなに擦りつけないでぇ♥

ねえ祐一さん、見てないで早くおちんちんをください♥

だめぇ…お母さん…最初は私なんだからぁ♥

あ、秋子さん名雪！

あはぁ

ああんっ

ああっ！いいわ祐一さん
ズニュッ
ズチュ
祐一！こっちも突いてぇ
ズチュ
あひいっなかが…え…えぐれちゃうぅぅ
ズブッ
ズチュ
ズプッ
だ、だめぇおかしくなっちゃうぅぅ
祐一さん…二人とも気持ちよくしてぇ
おねがい…祐一ぃ…
あぁんっ！すごいいっ
ズチュッ
グチュッ
祐一ぃっもっとおちんちんで擦ってぇ！
名雪…
ん っ
お母さん…
クチュッ
ピチャッ
ふぁ
ハァ
二人とも…お、俺、もう…
ハァ
ズニュッ
いいわ、祐一さんいっぱいかけてぇ！
あひぃ…わ、私も欲しいのぉ！
グチュッ
ビュルッ
くっ

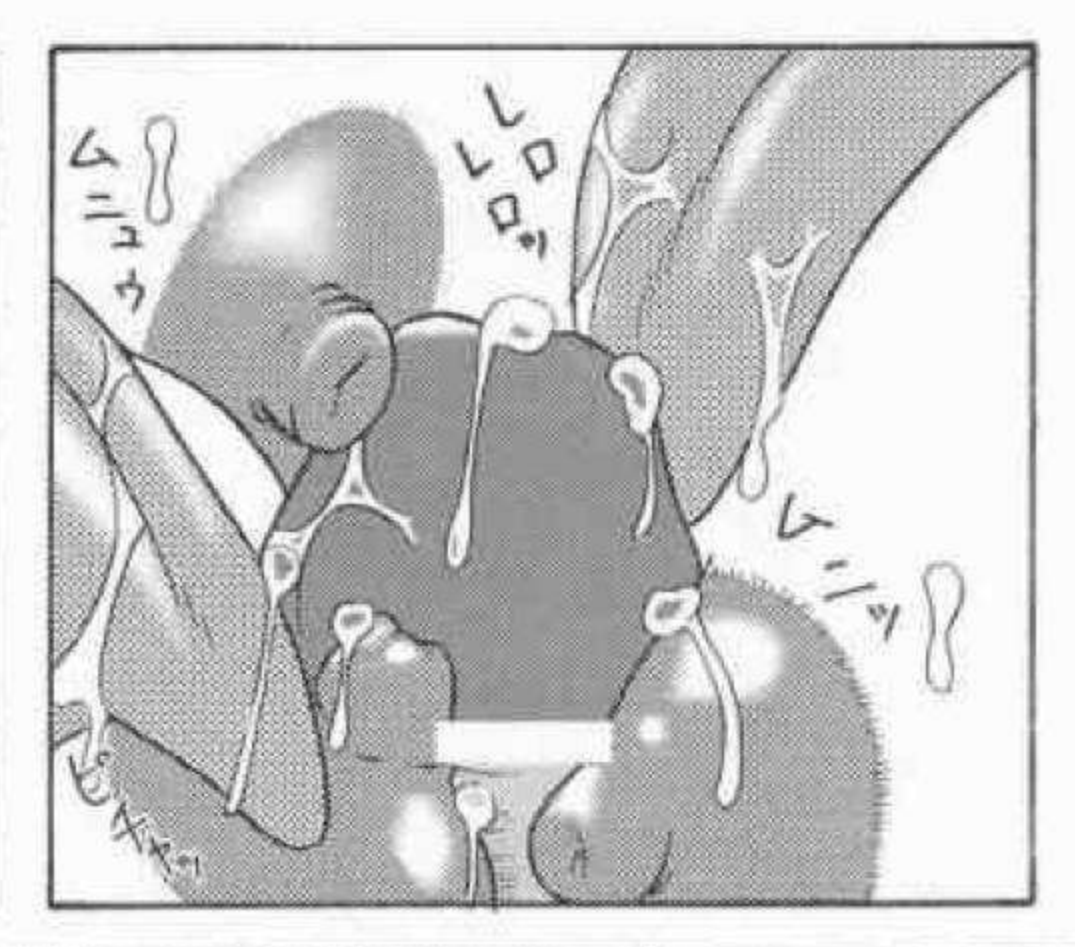
ああっ熱いのぉ！

ビュッ

ドクドクドクドク

ああんっだめぇ～！

ビュルッ



あらあら…祐一さんたら嘘ばっかり言って…こんなにおちんちんを硬くしておいて説得力がないですわ♥

ビクッ

そうだよ…祐一のおちんちんったら…おっぱいの先っちょで擦るたびにビクビクいってるよ♥

ビクッ

ピチャピチャ

レロチュプ

れろっ

ムニュッ

あっ

んっ

ああっ

ふっ

作品解説

○秋子と名雪のふたりで尽くしてあげちゃう

本当は春のコミレヴォに向けて描いた作品だったのですが、間に合わずにレヴォでだしたコピー誌に今回最後の４ページを追加して完成という事になりました。やはり二人いっぺんというのは描いていて難しかったですね。描き終えた後に反省する事が多数ありました。まあ、描く分には楽しいのでこの経験を次に生かしたいです。

それにしても…話も何も関係なく祐一がいき秋子さんと名雪に犯されるというかなり自分の妄想前回の話になってしまっておりますが…実は祐一がどうして秋子さん達に弄ばれる事になったのかとかも考えていたりするので次回はそこらへんを描いてみたいなぁと思っています。

○あちちな海の物語

これは、３月のサンクリで無料配布したペーパーにおまけで書いた成人向けのＳＳです。秋子さんと祐一に海辺でいろいろエッチな事をされるというないようにイラストをつけておおくりしました。今回は入稿日に余裕があったのでせかっくだから収録する事にしました。これからもこういう突発的なＳＳとか書いていきたいです…大体は即売会に新刊が出せないときに最後の手段的にやってしまうのですが（核爆）

あちちな海の物語

1

「祐一さん…お待たせしました」
砂浜にしかれたシートに寝そべっていた俺に後から呼ぶ声がした。俺はゆっくりと後ろを振り向いた。そして声の主にニコリと微笑んだ。
「遅かったじゃないですか…秋子さん」
「すみません。久しぶりの水着だったのでちょっと着替えに戸惑ってしまって」
俺の目の前には水着姿の秋子さんが立っている。下着と変らない面積の布地しか身に付けていないためか少し恥ずかしそうにうつむいている。
「別に怒ってないから謝らなくてもいいですよ。で、どうですか?久しぶりの水着は」
俺は立ち上がり秋子さんに近づく。
「うふふ…そうですね。久しぶりの海ですから年甲斐もなくちょっと大胆な水着を選んでみたんですけど…やっぱり恥ずかしいですね」
「年だなんてそんな…秋子さんは今のままでも十分魅力的ですよ
「うふふ…ありがとうございます。お世辞でも嬉しいですわ」
「お世辞なんかじゃないですよ。ほら、それを証拠に…さっきから周りの野郎達の視線が秋子さんに釘付けになってますよ」
そう言うと、俺は秋子さんの腰に手を回し、ぐいっと秋子さんを引き寄せる。俺の胸板で秋子さんの豊満な胸がぷにっと押しつぶされる。
「あっ…ゆ、祐一さん…やめてください。」
困惑した表情で俺を見つめる秋子さん…そんな顔をされるともっともっと悪戯したくなってくる。
「だってねぇ…こんなに美味しそうな胸を見せ付けられたら、健全な男の子だったら触りたくなっても仕方がないですよ」
俺は水着の上から秋子さんの胸を鷲掴みにする。手のひらに柔らかい感触が広がっていく。
「それにお尻だって…こんなにいやらしく自己主張していてもう…」
余っていたもう片方の手をお尻に這わせる。水着の布地の中に指を滑り込ませお尻の割目をなぞるように撫でまわす。
「ゆ、祐一さん…そ、それ以上は本当にだめです」
秋子さんは俺の手を振りほどこうとする。そんな秋子さんにお構い無しに胸をもみ続ける。秋子さんの大きく柔らかい胸が手のひらの中で形を変える。
「大丈夫ですよ…秋子さんが変な声を出さなければ恋人同士がじゃれあってるようにしか見えませんよ…」
「で、でも…こんなの恥ずかしい」
口ではそう言ってるものの俺の手に添えられた手の力が見る見るとぬけていくのがわかる。俺は更に追い撃ちの一言をかける。
「それに…秋子さんだっていつもはこうすれば喜んで体を擦りよせてくるじゃあないですか。」
「そんな…喜んでなんて…いません…あ、やぁ…そんなに強くされたら…」
「ふふ…体のほうは正直ですよ。せっかく海に2人っきりで来たんですから秋子さんもいつものように楽しんだらどうですか」
「で、でも…あっ、はぁ…ゆ、祐一さん…乳首は…ああん…い、いいっ」
もはや秋子さんは俺の体にもたれかかりその胸やお尻はなすがままになっていた。
「ここには…俺達の関係を知ってる奴な

んて誰もいないんですから大丈夫ですよ」
そう耳元で囁くと俺はシートの上に腰をかけた。
「おいで、秋子…」
俺が優しく言うと秋子さんは困った顔で…しかしこれから起こる事を期待しているかのように瞳を潤ませてゆっくりと俺の膝の上に腰を下ろしていった…

2

ぴちゅぅ…ちゅぷっ…ちゅぷっ
「あっ、あひぃ…だ、だめぇ」
海辺にくぐもった声と淫水を掻き分ける水音が静かに響き渡る。俺は秋子さんの水着の中に手を滑り込ませ胸と秘所をじかに愛撫している。秋子さんは周りに気付かれるの恐れてか必死に声がでるの抑えているが感じるツボを心得た俺の指が秋子さんの弱い所を擦り上げるたびに我慢できずに悩ましげな声を洩らしてしまう。
「秋子さんのここ…まだちょっとしか触ってないのに俺の指をずぶずぶと飲み込んでいきますよ」
俺は秋子さんにそう囁きかけると秋子さんのおま○この中に埋没させた指を水音が聞こえるくらいに激しくかき回す。
「や、やぁ…そんなに激しく描きまわさないでぇ…あっ…すごいぃ…そこ…いい…」
「ほら…そんなに大きな声を出してたらまわりの人たちに聞こえますよ」
そう言いながらも俺は秋子さんへの愛撫をいっこうに緩めない。
「そ、そんなのだめぇ…あっ…で、でも…あひぃ…」
秋子さんは手で顔を覆って恥ずかしそうにうつむくが体のほうは更なる快楽を貪ろうと腰を浮かせて俺の指を奥まで飲み込もうとする。
「あれ…秋子さん…向こうのカップル…なんかこっちの方を見てひそひそ言ってますよ…あっちの子供達もも不思議そうな顔してこっちを指差してますよ」
俺は秋子さんをからかうつもりでぼそりとそう耳打ちする。もちろん口からのでまかせだったのだが快楽の海に溺れかけている秋子さんにはその言葉だけで効果は十分だった。
「いやぁ…だめぇ…見ないでぇ…」
「秋子さんがそんな悩ましげな声を上げなければいいんですよ」
「で…でも…だ…だって…はひぃ…よ…よすぎて…こ…声が漏れちゃうのぉ…」
秋子さんはお構い無しに嬌声を上げる。このままだと本当に周りの人たちに気付かれかねない…
「仕方がないですねぇ」
俺は秋子さんに見えるように舌を差し出す。
「はぁん…ゆ…祐一さぁん」
秋子さんは躊躇せずに唇を重ねる
ん…んん…
俺の舌が秋子さんの口内を舐めまわすと秋子さんも舌を絡ませてくる。
ん…ぴちゃ…ぴちゃ…んん…
秋子さんが喉を鳴らして混ざり合うお互いの唾液を飲み下していく。もちろんキスしている間も俺の指は秋子さんの肉壁をえぐり、固くなった乳首を指で乱暴に押しつぶす。
「ん…んん…」
秋子さんは声を出すまいとこぼれる唾液もお構い無しに必死に俺の下を貪る。俺は更に秋子さんの剥き出しになった肉芽を指と指ではさみこむように強くすりつぶす。
「んん…んんん…」

秋子さんの体が弓なりにビクッっと痙攣する。俺はゆっくりと唇を離すと秋子さんの中から指を引き抜く。
「ゆ…祐一さん」
ぼうっとした表情で俺の顔を見つめる秋子さん…
「秋子さん…俺もそろそろ我慢できなくなってきました」
秋子さんの手を俺の股間を導く。
「あ…」
秋子さんは恥ずかしそうな顔をするが硬く膨張した俺のものを握ったまま離さない。
「あっちの岩陰に行きませんか…あそこなら人気も少なそうですよ」
秋子さんは無言でこくりと頷いた。

3

岩陰につくと俺は海パンを脱いで反り返ったものを秋子さんに見せる。
「あっ…祐一さんの…すごい…」
秋子さんは恍惚とした表情で俺のもの…いままで数え切れないくらい秋子さんを貫いてきたもの…を見つめる。秋子さんは俺の股間に顔を近づけるといとおしそうに俺のちんぽに舌を這わせ出した。
「はむぅ…祐一さんのおち○ちん…潮の味がしますぅ…ちゅぱ…」
舌をカリの部分に絡ませながら口の中に俺のちんぽを咥える。
ちゅぷ…ちゅぱ…
んん…じゅぷ…
秋子さんの顔が俺の股間で激しく上下に揺れる。見え隠れする俺のちんぽは秋子さんの唾液で黒く照り輝いていた。
「あ…秋子さん…いいですよ…もっと裏の方にも舌を這わせてください」
「ちゅぷ…あむ…ひゃい…ん…ちゅぷ…れろ…」
秋子さんの舌が俺の裏筋をなぞるたびに下半身から脳髄に向かって電流が走るような快感に襲われる。普段ならこのまま秋子さんのお口の中にたっぷりと精液を出すのだが、いくら人気がないとはいえここは海だ…いつ誰が来るか分からない。俺はフェラに夢中になっている秋子さんをゆっくりと引き離した…
「？…ゆ、祐一さん…」
秋子さんは口奉仕を途中でやめさせられた形になったので少し不満そうな声で俺を見上げる。
「どうしましたか祐一さん…私のお口…だめですか」
秋子さんが今にも泣きそうな顔で俺にすがりついてくる…
「いえ…その逆で…このままだとよすぎて秋子さんの口だけでいっちゃいそうだから…場所が場所だし二人で気持ちよくなったほうがいいでしょう」
俺は秋子さんの髪を優しく撫でる
「祐一さん…分かりました」
秋子さんもニコリと微笑み返してくれる。
「それじゃあ…俺は横になってるんで秋子さんの好きなように動いていいですよ」
そう言うと俺は横になる。
「え…で…でも」
いったん夢心地から少し覚めたかたちになってしまった秋子さんは白昼に青空の下で俺にまたがるのは恥ずかしいのか実を強張らせる。
「秋子さんどうしたんですか…気が乗らないんだったらやめますか」
俺はゆっくりと立ち上がろうとする。
「そ…そんな…いまやめられたら…私…おかしくなっちゃうぅ」

あっ
ムニュムニュ
やぁっ
くちゅくちゅ

「だったら…ほら」
少し口調を強めて言うと秋子さんはゆっくりと俺にまたがり俺のものに手を添えて自分の中に導いていく…
じゅぶ…じゅぶぶぶ…
「はあん…祐一さんのが私の中に入ってくるのぉ…」
秋子さんのおま○こが俺のものをゆっくりと飲み込んでいく。
「あふぅ…全部入ったのぉ…」
俺のものがすべて埋没すると俺のちんぽの硬さを楽しむかのように腰をくねらせる秋子さん…
「それじゃあ誰が来るか分からないからさっさといっちゃいましょう」
そう言うと俺は下から秋子さんを突き上げる。
「あひぃ…そ…そんな…いきなり…は…激しすぎ…」
そう言いながらも秋子さんは俺の腰の動きに合わせて自分の腰を激しく腰を振る。秋子さんの豊満な胸が激しく上下に揺れる。
「んあ、いいっ…いいのぉ…もっとぉ…もっと突き上げてぇ…」
秋子さんの肉壁が俺のものをきゅうきゅうと締め付ける。
「秋子さんも…動きが激しいですよ。そんなに俺のちんぽがいいんですか」
「あはぁぁ…いいのぉ…祐一さんのおちんちんがすごくいいのぉ…」
俺は更に深く打ち込もうと秋子さんの両腕をつかみ腰の動きを合わせる。あたりに肉と肉がぶつかり合う淫らな音が響き渡る。
「はひぃぃ…そ…それいいのぉ…奥まで…奥までおち○ちんがとどくのぉ…あ…秋子ぉ…変になっちゃうぅ…」
秋子さんの締め付けが急に強くなってくる。さっきまで浜辺で散々俺に弄り倒されたせいか絶頂が近いのだろう…俺のちんぽをうごめく肉壁が熱く絡んでいく。
「秋子さん…俺がイク前にイッたら今夜はお預けですよ」
俺は意地悪く秋子さんにそう宣告する。
「そ…そんなぁ…わ…私もう…はぁん…が…がまんできないぃ…」
秋子さんがたまらないといった顔でこっちを見下ろす。
「だったらもっと腰を使って俺の精液を搾り取ってくださいよ」
「は…はひぃ…」
秋子さんはもう一心不乱に上下左右にお尻を振っておれのペニスに刺激を与える。本当に限界が近いのか淫壁も俺のモノがちぎれそうなくらいに締め付けてくる…俺の下半身に激しい射精感がこみ上げてくる。
「いいですよ…その調子ですよ秋子さん」
「やぁ…は…はやくいってぇ…あ…秋子も…頭が真っ白になってぇ…も…もうらめぇ…」
秋子さんが叫ぶと同時に俺も限界が近づいてくる…
「くっ…それじゃあだしますよ秋子さん」
「は…はひぃ…ゆ…祐一さんの精液…い…いっぱいくださいぃ…」
秋子さんがそういい終わらないうちに俺は限界を超えて秋子さんの中に精液を放出する。
「あひぃ…わ…私も…イ…イキますぅ…」
秋子さんも絶頂を迎える。びくりと大きく痙攣するとぐったりと俺の上にもたれかかってくる。
「は…はあ…私の中に祐一さんの熱いものが…流れてくるのぉ…」
俺の上で秋子さんは恍惚とした表情を浮かべて終わった後の余韻に浸っていた…。

あっ♥
いいっ
ズボッ
ズボッ
ズボッ

「どうですか…青空の下であんな事をした感想は…」
帰りの電車の中…俺は秋子さんにだけ聞こえるように耳打ちする…
「すごく恥ずかしかったですよ」
顔を真っ赤にして答える秋子さん。
「でも秋子さんもあんなに乱れて…これが癖になっちゃったら俺の体がもたないかも…」
「もう…祐一さんのいじわる…」
「でも…秋子さんの水着姿…また見てみたいなぁ…」
「祐一さん…そんなエッチな目で言われると困りますよ」
「どうですか秋子さん。今度はこんな日帰りじゃなくて南の島に1週間くらい行きませんか？」
秋子さんの非難の目を無視してそう続ける。
「うふふ…いいですね。」
秋子さんもニコリと微笑み返してくれる。
「もちろん…今度も二人っきりでですよ…」
そう言うと秋子さんはさっきまでの事を思い出したのか更に顔を赤くしたが…
「うふふ…了承」
一言そう言うと俺にぴたりと体を寄せてくる…ワンピース越しに大きな胸の感触が伝わってくる。そして潤んだ瞳で俺の瞳を見つめて…ゆっくりとその瞳を閉じる。
「あ…秋子さん…」
俺がたじたじしてるのをチラッと見ると
「あらあら…さっきまであんなに積極的だったのに…」
と一言いうとぷいっと拗ねたように顔を背けてしまう…俺は慌てて秋子さんの肩を抱いてこっちを向かせる…そしてその唇に自分の唇を重ねた…

…END

あとがき

「あっ！ いやっ、早く…
スイッチを止めてください」

最後までお付き合いいただきありがとうございました．前回に引き続いて秋子さんのエッチな漫画をおおくりいたしました．漫画のほうは祐一が秋子さんに攻められてＳＳの方は祐一が秋子さんを攻めてと実は結構一粒で二度おいしい内容になっているのではと思ったりしました（核爆）

それにしても…話も何も全ページ裸だけの内容になってしまいました…「Ｋａｎｏｎは関係ないでしょ～！」と蒼天の人に怒られてしまいそうです（笑）次回以降はちゃんとお話のほうも組み立てていこうと思います。

それでもやはり全ページエロシーンの漫画というのも結構疲れますね．ページ構成、レイアウト…そして画力とすべてにおいて力不足を痛感してしまいました．絵を描く事は好きなのでがしがしと精進していくしかないっすね．

それにしても前回は秋子さんの看護婦モノ今回は秋子さんと名雪の母娘ドンブリモノ…次はどうなるのでしょうか。秋子さんぶるまあモノとかスク水モノとかどうしようもないことばかり頭に浮かんできますがまだまだ描きたい事がいっぱいあるのでよろしかったらお付き合いいただけると嬉しいです．

それでは今回はこの辺で失礼したいと思います．最後になりましたがこの本を手に取ってくれた皆様、最後までお付き合いいただきありがとうございました．

和泉弥生

○前書のスカートたくし上げ秋子さんを更にパワーアップさせて祐一の命令でおもちゃをいれたまま一日を過ごすことになってしまった秋子さんです．いまは確認のために自らスカートを上げて中を祐一にじっくりと見られています．もちろんリモコンは祐一が…げふっ、妄想が全開になってしまいました（核爆）

Kanon Fan Book Vol.10
Akiko Minase
Nayuki Minase